

## 「専門学校の進学要因と就業状況に関する

### 実証分析」

早稲田大学教育学部社会科社会科学専修

乗松拓理

吉岡宏真

小野恵里佳

### 要旨

本稿は、専門学校進学の規定要因を明らかにするとともに、大学進学をせずに専門学校に進学することで将来的にどのような違いが生じるかを検証することにより、これまで必ずしも学術的に注目されてこなかった専門学校の意義を考察することを目的としている。そこで本稿では、高校3年生時点から5年間にわたり同一個人を追跡調査したユニークなデータを利用して、専門学校進学に関して3つの視点から分析を行った。分析の結果、専門学校に進学する学生は成績や家庭の裕福度だけでなく、学歴よりも資格が重要と考える価値観が強い傾向にあること、propensity scoreを用いて似た属性同士にウエイトをかけて大学進学および専門学校進学の違いがもたらす帰結を検証したところ、専門学校に進学するほうが正社員登用や希望職種への就職の可能性が高まること、高校での進路指導が将来のキャリア形成に重要な影響を及ぼしていることなどが明らかになった。

## 1 はじめに

日本の18歳人口は1993年をピークに減少を続けている。そうした中、昨今の大学進学率は50%水準を推移し、入学希望者総数が入学定員総数を下回る「大学全入時代」の局面に突入している。しかし、高卒就職や短大進学は年々減少しているものの、専門学校進学者率は大きく落ち込んでおらず、むしろこの数十年の長期で見れば横ばいの推移を辿っている。本稿は、大学進学が容易になった今、高校卒業後の進路としてどのような学生がどのような理由で専門学校を選択しているのか、そして専門学校を選択することによって卒業後にどのような帰結が待っているのか、を明らかにすることを目的としている。後述のとおり、専門学校進学に関する先行研究はいくつか存在するものの、大学進学に関する研究に比べるとその数は少ないほか、進学者本人の社会意識・高等教育機関への価値観といった進路決定の際の決定要因や進路決定における家族の影響にまで踏み込んだ分析は、筆者らが知る限りほとんどない。

そこで本稿では、以下の3つの角度から、進路選択に関して高校3年生およびその親を対象に実施した親と子のアンケート調査と、その対象学生を5年間にわたり追跡調査したユニークな個票データを用いて専門学校に進学する学生に関する検証を行う。

第一の分析では、どういった特徴を持つ生徒が専門学校、大学、短大および高卒就職を選択するのかを明らかにする。その後、専門学校進学を選択に関わる要素をより詳細に把握するため、専門学校進学者と大学進学者間での進学決定要因を推計する。

また、大学進学ではなく専門学校への進学を選択することによって、卒業後の就職や賃金がどの程度異なるのかについても先行研究はあまり多く存在しない。そこで、本稿では第二の分析として、専門学校に進学した場合と、大学に進学した場合で賃金、正社員登用の有無、希望職種への就職の可否といった労働条件や就業状況にどのような違いが生じうるかを、検証する。

そして最後の分析では、専門学校への進学を選択した学生のうち、高校3年生時点でどのような特徴や、仕事・家庭に対する価値観を持っていた人たちが、進学後も自分の希望する道を歩み続け、最終的に希望する職についているかを明らかにしたい。以上、本稿では三つの分析を通して、大学進学全入時代における専門学校進学の規定要因および、専門学校に進学することの帰結を定量的に把握することが目的である。

本稿の分析で得られた結果を予め要約すると、以下のとおりである。まず、分析1-1では、特に「中3成績」「父親所得」といった本人の属性や家庭環境だけでなく、「学歴よりも資格が重要」という価値観が進路選択において重要な要因となっていることがわかった。分析1-2では、専門学校進学を選択する学生は進学理由が明確であり、親と共に資格取得を重要視していたことから、彼らは大学進学者よりも明確な将来のビジョンを持つという特徴が明らかとなった。分析2では、専門学校進学者は正社員になりやすく、希望職種に就きやすいことが明らか

となり、大学進学によって労働状況が向上されるとは限らない結果になった。しかし、待遇満足度では有意な結果が得られなかったため、雇用形態や職種以外の労働待遇では負の影響を及ぼしている可能性が残っている。分析3では、学校の進路指導担当のアドバイスを受けること、親の意見ではなく自らの意思で進路先を決定することが重要だとわかった。

本稿の構成は以下の通りである。2節では先行研究を概観する。続く3節では、高等教育機関への進学率や卒業後の賃金データなどを時系列で観察し、分析への仮説を立てる。4節では分析に用いるデータの解説を行い、5節で分析結果を示し、最終節で結論を述べる。

## 2 先行研究

本節では、まず、本稿の分析に関連する先行研究を概観する。

### 2-1. 専門学校進学決定要因の先行研究

高等教育機関への進学要因として「本人の成績や家庭環境」に注目した論文がある。例えば金子・吉本（1988）は、国立・私立の四年制大学、短期大学、専門学校の進学選択に、両親の所得・学歴・職業と学業成績が及ぼす影響を検証している。分析の結果、家庭所得が高くなるほど高等教育への進学確率も高まることを示している。

本稿の分析では、家庭属性に加えて、「進学の重要性をどれほど感じているか」「働く上で必須となる能力は何だと考えるか」といった、高校3年生時点での本人の進学や就業に対する考え方や、親の価値観や意識を変数に組み込み、専門学校・短大・大学・高卒後就職の選択要因を分析する。また上記の研究は、大学進学率が50%水準になる以前の時代のデータを元にしたものであり、より最新のデータを用いているのも本稿の特徴である。

### 2-2. 各高等教育機関卒業後の所得に関する先行研究

各高等教育機関への進学行動を経済学的に評価する先行研究として、濱中（2009）が挙げられる。濱中（2009）は、2004年にリクルートワークス研究所が実施した個票データである『ワーキングパーソン調査』を利用し、専修学校卒業生の就業先を「要資格職」「非資格職」に分けた上で、他学校卒業生との所得差を男女別で明らかにした。分析の結果、男性専修学校卒は資格の有無に関わらず高卒と同程度の所得しか得られないこと、女性は資格の有無に関わらず高卒より高い所得を得ることが可能だが、大卒者には及ばないことがわかった。

濱中（2009）は専門学校卒と大卒の所得差を比較しているが、我々は大卒者をさらに絞り込み分析を行う。具体的には、似通った能力や価値観を持つ大学進学者と専門学校進学者を抽出し、彼らが専門学校に進学した場合と、大学に進学した場合とで所得等に優劣があるのかどうかを検証する。

### 3 データと仮説

本節は、次節の分析に入る前に、既存のデータを利用して、専門学校に関する動向を概観し、これらを提示しながら、分析への仮説を立てていくこととしたい。

#### 3-1. データ 進学率の推移

はじめに、文部科学省『学校基本調査』のデータを元に、高等学校卒業者の進路状況の時系列推移を観察する。図1は、1985年から2015年の高等学校卒業者の進路状況を示したものである。このグラフから観察できるのは以下のことである。

就職率の変化はこの30年で大きく変化しており、大学進学率は就職率の減少に反比例するように増加している。1985年に20%弱だった大学進学率は、バブルが崩壊した1991年ごろから右肩上がりに上昇し始め、2000年代末ごろには50%弱まで上昇した。しかし、短大と専門学校の進学率は、大学進学率と異なった様相を示している。まず短大進学率であるが、1994年をピークに現在は5.2%まで落ち込んでいる。一方、専門学校の進学率は、2004年の19.2%が最も高く、2015年の16.7%へと低下傾向にあるものの、短大に比べると大きく推移を落としていないことがわかり、時系列で観察しても横ばいの推移を示していることがわかる。

#### 3-2. データ 学歴と賃金の推移

次に、学歴別の賃金に関するデータを概観していく。データは厚生労働省『賃金構造基本統計調査』を使用した。図2のグラフは1999年から2015年までの男女別に分けた学歴別の所定内賃金(35~39歳賃金)の大卒を100%とした学歴間の賃金格差の推移を示している。ただし学歴において専門卒だけの賃金データがないため、専門卒の賃金データは高専と短大の卒業者が含まれてしまっている。また、大学卒のみの賃金データもないため、こちらは大学院卒の卒業者を含めたデータになってしまっている。この点において、大卒と専門卒の単純比較を行うことができないが、本稿では高専・短大卒を含んだデータを専門卒、大学卒に大学院卒を含んだデータを大学卒として扱うので留意していただきたい。

図2から大卒優位な状況は変わらず、専門卒、高卒、中卒と続くことが観察され、16年間で学歴間の賃金格差があることは変わらないといえる。しかし、男女では格差の程度が異なる。2015年の男性の賃金格差は大卒の100に対して専門卒79.2%、高卒74.9%、中卒74.2%である一方、女性の賃金格差は大卒の100に対して専門卒83.3%、高卒68.3%、中卒61.9%である。男性の場合、中卒と高卒との差がほとんどなく、専門卒との差も5%と大きくはない。一方で女性の場合、専門卒は中卒、高卒と比べて対大学賃金が15%~21%ほど高い水準にある。以上から、学歴間の賃金では大卒優位の賃金格差が続いていることがわかった。しかし、男女ともに専門卒

が大卒に次ぐ賃金を得ており、特に女性では専門卒と中卒、高卒間の差も大きい。このように、日本では学歴があがるにつれて賃金増加も観察される。

### 3-3. データ 就職率

次は、学歴別の就職率のデータを観察する。専門学校は職業選択を見据え資格習得を目指し進学するため、職業訓練学校としての側面も強く、そのため就職率は近年においても高水準で保たれている。以下では、文部科学省『学校基本調査』を使用して作成したグラフから大学・短大・専門学校の就職率を観察していく。

図3の推移は過去30年間の大学・短大・専門学校の就職率の推移を示したものである。大学と短大は1991年ごろから2000年代初頭のいわゆる就職氷河期は大きく就職率を落としている。しかし、そうした中でも専門学校は大学や短大ほどそうした就職難の影響を受けていない。その理由として倉内(1980)が、専修学校は職業技術習得の期間として機能を果たしていると指摘するように、専門学校では学生が職業訓練を通じて専門的な知識や技能を身につけていることにより安定した就職状況を生み出していることが考えられる。また、専門学校は進学した学科に関連した分野への就職率も極めて高く、2015年の文部科学省『学校基本調査』のデータによれば、2015年の専門学校の就職率81.2%に占める関連職業への就職率は75.9%である。

### 3-4. 問題意識と仮説

以上より、高等学校卒業者の進路状況及び学歴別の賃金格差と就職率を検討した結果、進路状況から過去30年で高校生の進路選択は大きく変わったことがわかった。また、学歴上昇につれて賃金が高くなること、専門学校が就職難の影響を受けにくいことが観察された。こうした結果から、進路選択の観点では、賃金と就職率はそれぞれ大学・専門進学インセンティブとして働いていると考えられる。一方で、学歴間を越えるような大きな変化がないため進路選択の変化の一因でしかないとも考えられる。そこで本稿では1つ目の分析1として2005年のデータを用いて進路状況別の進路意思決定についてより詳細な分析を行う。学生にとって進路選択は進学者本人の社会意識・高等教育機関への価値観や親の同様の社会意識・価値観または親の学歴や家庭の経済状況、さらには所属する高校などによっても変わることが考えられ、本分析ではこうした様々な要因を考慮した上で分析を行う。

続く2つ目の分析2では、専門学校へ進学することによる教育効果の分析を行う。過去の先行研究では専門学校の教育効果を分析した研究は少なく、濱中(2009)は大学の教育効果を分析した研究が盛んに行われているのに対して専修学校の研究が進展していないことを指摘している。また、矢野(1996)は日本の雇用について、学歴主義が日本の雇用システムに密接に関

係しているとし、学歴を過剰に意識する風潮を作っていると指摘している。さらに、矢野（1984）が主張した高学歴と収益率が正の因果関係を持つとの研究結果から大学進学と就職の結びつきを強めているのではないかと考えられる。そのため、昨今の学生は大学に進学する進路選択を過剰に評価し過ぎているのではないかと考えた。そこで分析2では、こうした学歴主義を背景とした大学進学を問題意識とし、進学意思決定において専門学校もしくは大学に進学することを視野に入れた学生が専門学校に進学することで得られる教育効果と大学に進学することの教育効果を比較検討する分析を行う。

最後に、専門学校が職業訓練学校の側面を有することから、高校生で専門学校に進学を選択することは、進学先に関連した職業を志したうえでの選択であるともいえ、高校生には重要な意思決定が課せられる。そのため、自分の専門学校への進学意思を決定させる要因として、自分の進路について深く考え、また周りの家族や教師といった身近な大人との相談が重要になる。一方で、進路選択について深く考えず、専門学校に進学することについて家族や教師といった身近な大人と相談をせず進学を行う学生も一定数いるだろう。そこで3つ目の分析では、高校3年生時点において、どのような要因で専門学校進学を選択した学生が、進学先で希望通りの内容の勉強をし、最終的に希望通りの職種に就職しているのかを検証する。

#### 4 分析データ

本稿では『高校生の進路についての追跡調査（第1回～第6回）、2005-2011』の個票データを用いる。これは東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから提供を受けたデータであり、第1回調査時点（2005年11月）で高校3年生であった対象者をその後5年間（第2回は2006年3月、第3回は2006年11月、第4回は2008年1月、第5回は2009年12月、第6回は2011年2月に実施）にわたり追跡調査したものである<sup>1</sup>。調査項目には対象者自身の進路に対する考え方や家庭環境、進学および就職後の価値観など、その時々に応じた設問によって構成されている。また第1回調査は、保護者に対しても、子どもの進路選択に関する質問を行っており、親子のマッチデータとして利用することもできる。学生回答と保護者回答の2種類を用いることで先行研究では取り扱われてこなかった、進路に関する親の価値観も分析することが可能となる。

調査対象は第1回で回答を得られた4000人で、継続回答率は第2回が87.3%、第3回が72.6%、第4回が49.7%、第5回が38.3%、第6回が41.4%である。

---

<sup>1</sup> データの利用をご許可くださった東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブにこの場を借りて深謝申し上げます。

なお、表 1 には、本稿で用いる個票データと『学校基本調査』（文部科学省）で進路先形態の割合を比較した値を掲載した。どちらも、2005 年 3 月の高校卒業時点での進学先割合を使用している。専門学校進学者と短大進学者では両調査間で大きな差は見られないが、本稿で使用するデータは、学校基本調査に比べて高卒就職率がやや低く、大学進学率がやや高い傾向にあり、若干ながら進学率が高めのサンプルである点に留意が必要である。

#### 4-1-1. 分析 1 - 1

分析 1 - 1 ではどういった特徴を持つ生徒が専門学校、大学、短大および就職という進路選択をするのか、多項ロジットモデルを用いて明らかにする。本稿では先行研究を踏まえ進路選択に影響を与える要因を、『本人の属性』『親の属性』『環境要因』『本人の価値観』『親の価値観』の 5 つのカテゴリーに分類している。なお、分析 1 で用いる説明変数群は 2005 年 11 月時点での学生回答である。推計モデルは以下の通りである。

$$Y_i = \alpha + S_i\beta_1 + P_i\beta_2 + E_i\beta_3 + SV_i\beta_4 + PV_i\beta_5 + \varepsilon_i$$

ここで、 $Y$  は進路選択のダミー変数、 $S$  は本人の属性に関する変数群、 $P$  は親の属性に関する変数群、 $E$  は環境要因に関する変数群、 $SV$  は本人の価値観に関する変数群、 $PV$  は親の価値観に関する変数群、 $\varepsilon$  は誤差項、添え字  $i$  は個人を指す。以下では、個別の変数について具体的にみていく。

まず、 $Y_i$  は被説明変数である「進路ダミー」を示している。この「進路ダミー」は、2006 年 3 月時点で進路先に関する設問の回答をもとに、専門学校進学者を 1、大学進学者を 2、短大進学者を 3、高卒での就職決定者を 4 と設定したものである。留意点として、この進学ダミーに浪人生は含まれていない。

次に説明変数をみていく。『本人の属性』では「中 3 成績」「性別ダミー」「長子ダミー」の 3 つを用いる。「中 3 成績」は本人の生まれつきの能力をコントロールすることを目的にしている。これは客観的な指標ではなく、本人が学年全体でどれくらいの成績を有していたのかを 5 段階で選択した主観的な指標であることに注意が必要である。「性別ダミー」は男性を 1 にしており、「長子ダミー」は本人が長男及び長女である人を 1 としている。うち「中 3 成績」は頭がいい人ほど大学進学すると考え、大学進学者ではプラス、その他の進学先に行く人ではマイナスになると予想した。

『親の属性』では、両親の学歴および所得を説明変数にしている。両親の学歴はそれぞれ大卒である両親をベースにしている。進学に関しては、両親の学歴が中卒・高卒である場合は子どもに進学を薦めるインセンティブが薄いと考えマイナスに、専門短大卒は自らの経験から高

等教育機関に進学させようとすると考えプラスと予想した。なお、両親の所得は 200 万円ごとの階級値を選択する形式になっているので、各階級の中央値を選択した。

『環境要因』としては、両親と成績や進路について会話をしたかを表す変数を用いる。これは両親と将来について考える機会が多い学生ほど、進学重要性を認識している可能性があるかと予測したためである。「クラス大学進学希望」は、高 3 時のクラスに大学進学を希望している人がどの程度いたかを示している。さらに、成績を親と会話している、進路について親と会話しているかどうかのダミー変数は、それぞれ「成績を親と会話」「進路を親と会話」という変数名としている。自身の成績状況および進路選択を親と共有することが、高等教育機関への進学を見据えた行動をとっていると考え、専門学校、大学、短大へ進学した人はプラスになると予想した。

『本人の価値観』を表す変数として、4 つの質問項目への回答を用いる。具体的には、「大卒と高卒で収入差ある」「学歴よりも資格が重要」「年功序列ではなく本人の能力が重要視される」「学歴で安定的な生活が保障されるとは限らない」の 4 項目に対する回答をそれぞれ「大卒高卒収入差」「意見資格重要」「意見実力第一」「意見学歴安定でない」という変数で採用しており、「意見」の 3 項目はダミー変数となっている。

なお、本稿で用いるデータは、子どもだけでなくその親にも同じ質問を行って価値観を問うユニークな調査となっており、本稿ではこの情報を利用して『親の価値観』についても説明変数に加える。具体的には、今後の社会では何が重要視されるようになるかについての 3 項目を、それぞれ「親・意見資格重要」「親・意見実力第一」「親・意見学歴安定でない」とする。

この 2 つのカテゴリーでは「資格重要」が大学でマイナス、専門学校を含む他の 3 つではプラスになると予想した。これは専門学校が職業訓練を果たす教育機関である背景が大きく関わっており、専門学校は学歴の側面では恩恵を受けにくい、資格を取得する機会が多いと考えたためである。

#### 4-1-2. 分析 1 - 2

分析 1-2 では、専門学校進学者と大学進学者にサンプルを限定したうえで進学決定要因を推計し、専門学校進学者の属性を探る。対象を二者択一にしぼって推計することで、進学先の選択にかかわる要素をより詳細に把握することができる。説明変数には分析 1-1 で用いた 5 つのカテゴリーと、『進学理由』を加えた計 6 つのカテゴリーで構成されている。ここでは以下に示す Probit モデルを用いて推計をおこなう。

$$Y_i = \alpha + S_i\beta_1 + P_i\beta_2 + E_i\beta_3 + SV_i\beta_4 + PV_i\beta_5 + R_i\beta_6 + \varepsilon_i$$



ここでは新たに進学理由に関する変数群  $R$  を加えている。

被説明変数  $Y_i$  には、専門進学者を 1、大学進学者を 0 とする「専門進学ダミー(大学)」を置く。残りの変数は基本的に分析 1-1 の推計と同様であるが、以下は違う点を説明する。

分析 1-2 では、進学した人のみに問うた質問項目を利用して、『進学理由』という情報を変数に追加した。具体的には、進学理由として「学生生活を楽しみたい」、「やりたいこと見つかる」、「職業直結」、「実用的な知識・技能」のそれぞれ 4 項目に関する回答を利用した。うち「職業直結」「実用的な知識・技能」の 2 項目は、将来像が明確になっているという点が専門学校の実学要素と密接な関わりがあるため、プラスに有意と予想した。「学生生活楽しみたい」「やりたいこと見つかる」の 2 項目はそれぞれ、サークルなどの学外活動が充実している、在学中に幅広い経験をして将来を考えることができるという点が、専門学校より大学で味わえる要素であると考え、マイナスになると予想した。

#### 4-2. 分析 2

分析 2 では、大学または専門進学への意思決定（分析 1-2）において専門学校に進学する属性（性別、学力、家庭環境など）を有する学生に焦点を絞る。そのうえで彼らが専門学校もしくは大学のどちらに進学するのかによって就職の可否、正社員の可否、賃金、希望職種就職の可否、待遇満足度といった労働状況にどのような影響を与えているのかを分析する。サンプルは専門学校進学者と大学進学者に限定する。本稿では、こうした推計を行うために propensity-score-weighting に基づく加重最小二乗法を用いた分析を行う。推計モデルは以下のとおりである。

$$Y_i = \alpha + SS_i\beta_1 + S_i\beta_2 + WE_i\beta_3 + P_i\beta_4 + \lambda_i + \varepsilon_i$$

$$\lambda_i = \frac{VS_i}{PS_i} + \frac{1 - VS_i}{1 - PS_i}$$

$Y$  は進路選択のダミー変数、 $S$  は本人の属性に関する変数群、 $WE$  は労働環境要因に関する変数群、 $P$  は親の属性に関する変数群、 $\varepsilon$  は誤差項、添え字  $i$  は個人を指す。

ここでは、専門学校（あるいは大学）に進学する属性を持つにも関わらず、大学（あるいは専門学校）に進学することによって卒業後の賃金や就業状況等にどのような差が生まれるかを、propensity-score-weighting に基づき、似た属性を持つサンプルにウエイトを付けることによって検証する。propensity-score-weighting の推計では、被説明変数に専門学校進学した者を 1、大学進学した者を 0 とするダミー変数（ $SS$ ）を採用し、説明変数には第一の分析にて専門学校進学要因として統計的に有意となった変数を用いる。具体的には、「意見資格重要」「職業

直結」「実用的な知識・技能」といった変数を採用する。

被説明変数  $Y$  には、第 6 回目の調査の情報を用いて、以下の 6 つを採用する。①就職の有無、②正社員か否か、③賃金（月給）、④賃金率（月給を労働時間に除して時給換算したもの）、⑤希望職種に就職できたかどうか、⑥待遇満足度（現在の待遇に満足しているかどうか）である。①②⑤⑥は、0 か 1 をとるダミー変数である。なお、第 6 回目の調査は高校卒業後 5 年目にあたるため、大学進学者も専門学校進学者も共に就職している。①就職の有無②正社員か否かの分析は、就職の有無はデータを裏付ける結果を得られるかを検証し、正社員か否かは就職先の雇用安定も保証しているかを確認するために行う。また、③と④の賃金の検証では、似たような属性を持つ専門学生と大学生の間で賃金の差が生まれているのかを確認する。このほか、⑤希望職種に就職できたかどうかは、賃金では測ることができない職種に関する希望の実現が、専門学校と大学間でどの程度異なるかを把握するために分析する。最後に、⑥の待遇満足度は、賃金や正社員以外での雇用待遇すべてを総合して現状の就職に満足しているかを分析する。

説明変数には、性別、生まれつきの能力の代理変数として中学 3 年生時における成績状況を採用した。また、それぞれの被説明変数に合わせて、労働状況に影響を与える従業員数、勤続年数、正社員ダミーを説明変数に加えて分析する。なお、被説明変数に正社員ダミーを入れて分析する際は、説明変数から正社員ダミーを外し、代わりに説明変数に両親が正社員かどうかを入れて分析する。これは親が正社員として安定して仕事をしていることが子供の就職に影響があるかどうかを分析するために加えた。

#### 4-3. 分析 3

最後に、高 3 時点でどういった要素を兼ね備えていたのかを、分析 3 で推計する。本稿ではサバイバル分析を用いて、サンプルを専門学校に進学すると回答した 596 名に絞って推計を行っている。

$$Y_i = \alpha + S_i\beta_1 + SC_i\beta_2 + SI_i\beta_3 + ST_i\beta_4 + PT_i\beta_5 + \varepsilon_i$$

$Y$  は持続期間、 $S$  は本人の属性に関する変数群、 $SC$  は進路意識に関する変数群、 $SI$  は進路影響に関する変数群、 $ST$  は進路考慮、 $PT$  は親の進路考慮に関する変数群、 $\varepsilon$  は誤差項、添え字  $i$  は個人を指す。

被説明変数  $Y_i$  は「持続期間」を用いている。この「持続期間」とは、専門学校に明確な意思をもって進学した人がその意思をその後もどのくらいの期間持続しているかを表す変数である。「持続期間」は第 2 回から第 6 回の計 5 回からそれぞれ 1 問ずつ設問を抽出し、0 と回答

もしくは回答しなかった段階で脱落するように作成している。具体的には第 2 回調査は〈進路選択に満足しているか〉、第 3 回は〈学校生活でやりたいこと見つかるか〉、第 4 回は〈通う専門学校を選んでよかったか〉、第 5 回および第 6 回は〈希望していた仕事と思うか〉という設問で、それぞれ YES と答えた人を 1、ある段階で NO と答えた人を 0 とする。第 6 回の調査まで意思を持ち続け、希望していた仕事に就職した人は最大 5 という持続期間が、入学した段階でそもそも意思がなかった人は 0 という持続期間を持つことになる。推計は、Cox 比例ハザードモデルを使用する。

説明変数は、第 1 回の親子のマッチデータの設問を採用している。『進路意識』を表す変数は、「高 1,2 進学意識」と「進路決定済」の 2 つから成る。この変数で、早い時期から専門学校進学を決めていたことがどう影響するかを見ることが可能となる。「高 1,2 進学意識」は高校 1, 2 年の段階で高等教育機関に進学することを考えていたか、「進路決定済」は第 1 回調査時点（高 3 の 11 月時点）ですでに進路先が専門学校に決定していたかを示している。『進路影響』は、専門学校進学を選択を周囲の人々や資料などによって決断したかをはかるために用いている。具体的には家族、友人、学校の進路指導、中高の先生、塾の先生、就職ガイドブック、企業訪問、学校パンフレット、オープンキャンパスの 9 項目である。『進路考慮』および『親の進路考慮』は、進路決断において以下の項目をどれくらい考慮したかを判断することが目的である。使用する変数は成績、家庭経済、家庭事情その他、立地近さ、志望明確の 5 つから構成されている。うち「進路考慮・成績」は学校の成績や入試、「進路考慮・立地近さ」は、近くに適当な進学先があるかを表している。「進路考慮・家庭事情その他」は、家庭の経済状況以外の事情による影響を示している。

## 5 分析結果

### 5-1. 分析 1-1

「進路ダミー」を被説明変数に置いた多項ロジットモデルの結果は、表 6 に掲載した<sup>2</sup>。表 4 の(1)から(4)列には順に、専門学校進学者、大学進学者、短大進学者、高卒就職者の限界効果を示している。

『本人の属性』である「中 3 成績」は 4 列全てで統計的に有意となり、大学進学者以外が全てマイナスの係数となっている。大学進学するか否かは中学 3 年生時点の成績に影響を受けることが分かる。「性別ダミー」では専門学校と短大がマイナスに、大学のみプラスに有意となった。これより、男性は女性よりも大学への進学傾向があり、一方女性は専門学校と短大に進学する傾向があるとわかった。また「長子ダミー」では専門学校と高卒がマイナスに、大学は

---

<sup>2</sup> 分析は全て、統計ソフト Stata を利用して行った。

プラスに有意となった。長子は大学進学を、長子以外は専門学校進学・高卒後就職の選択をする傾向が明らかとなった。

『親の属性』として用いた両親学歴であるが、専門学校では「父親高卒」、「父親専門短大卒」、「母親高卒」、「母親専門短大卒」がプラスに有意となった。また、高卒で有意になった両親学歴変数も全てプラスの係数を持つ一方、大学進学者のうち有意となった変数は、全てマイナスの係数を持つ。両親が大卒か否かによって、子供の進学先も影響を受けることが明らかとなった。また「母親所得」は、全ての列で関連性が見られなかった。しかし「父親所得」は4列全てで有意になり、大学進学者のみプラスとなった。家庭の裕福度が大学進学の規定要因となっている点は、先行研究とも整合的である。

『環境要因』である「クラス大学進学希望」は、大学、専門、高卒で有意となった。クラス内で大学進学する人が多いほど大学進学者は増加し、専門学校進学者と高卒就職者は減少する傾向がある。「成績を親と会話」の結果であるが、会話をするほど大学進学確率が増加する一方、専門進学確率は減少する。大学進学は、まさに成績やそれを反映した学力に基づき進路先が決定するため、プラスの係数になると推測できる。専門学校がマイナスの値であることは、成績が悪い人ほど大学進学をせずに専門学校進学を選択するというを示唆している。一方「進路を親と会話」では、親と会話をするほど専門進学者数が増えるが、その他の進学先では関係性が見られなかった。確かに、専門学校は他の進学先に比べ、入学時点で未来の職業が決定しやすい。そのため、両親と進路について会話をするが多くなると解釈できる。

『本人の価値観』を表す変数であるが、「学歴よりも資格が重要」という意見は4列全てで有意となっており、限界効果は、専門学校がプラスで最も大きな値となった。資格を重んじる人が専門学校を選択しているといえる。また、大学についてはマイナスの値であり、学歴重視社会と考える人は、大学進学をする確率が高まることが読み取れる。「大卒と高卒では収入差がある」「年功序列ではなく本人の能力が重要視される」という意見は、高卒のみマイナスで有意の値を示した。実力第一の社会で勝ち残るには、高卒が不利だと考える人が多いのだろう。「学歴で安定的な生活が保障されるとは限らない」という意見は、4列全てで関連が見られなかった。

『保護者の価値観』のうち「学歴よりも資格が重要」という意見は、専門学校ではプラス、大学ではマイナスに有意となり、それぞれ子供の「意見資格重要」の符号と等しくなった。なお、専門学校について、子供とその親の「意見資格重要」の係数を比較すると、子供のほうが限界効果の値が大きくなっていることが分かる。これは、親も子も資格が重要と考える場合には専門学校への進学確率が高まるが、子供自身の考え方のほうが大きく影響していると解釈できる。なお、「年功序列ではなく本人の能力が重要視される」「学歴で安定的な生活が保障さ

れるとは限らない」という意見は、4列全てで関連が見られなかった。

### 5-1-2. 分析 1-2

表 7 は、専門学校進学者と大学進学者にサンプルを限定したプロビットモデルの推計結果を示している。表中の係数はいずれも限界効果である。

結果は、表 6 で確認されたこととほぼ同じとなっているため、以下では新しく追加した進学理由の変数について言及する。『進学理由』の項目は、すべての項目が有意となった。「学生生活楽しみたい」「やりたいこと見つかる」はともにマイナスに有意となり、専門学校進学者はこの 2 項目を重視していないことがわかった。「職業直結」「実用的な知識・技能」は、将来を見据えた選択をしていることから専門学校進学への傾向が強くなるとした予想と合致する。ここでの推計結果を元に、次節の Propensity Score を計算することとする。

### 5-2. 分析 2

上記の分析 1 の結果からは、成績の良し悪しといった本人の属性だけでなく、家庭環境や周りの進学状況、本人と親の価値観などが卒業後の選択肢に多大な影響を与えていることが明らかになった。似た属性を持つ人々が大学もしくは専門学校に進学することで、異なる結果をもたらすかを検証するため、Propensity Score でウエイト付けした加重最小二乗法で推計を行う。表 8 は、その結果を示している。

第 2 節で示した集計データでは専門学校は高い就職率を示していたが、似た属性同志で比較すると、専門学校は「就職」には統計的に有意な結果を示さなかった。一方で「正社員就職」においては統計的にプラスに有意な結果を示した。よって専門学校に進学することで就職先の雇用も保証される傾向にあることが明らかになった。

「賃金」では、月給及び賃金率を表わした時給でも統計的に有意な値を示さなかった。よって、似た属性を持つ学生同士の間では、進学先が異なることでは賃金に差は生まれないことになる。この点は、月給を労働時間で除した時間当たりの賃金を被説明変数にした場合でも同様の結果となっている(表 8 の(4)列)。これらの結果は必ずしも大学進学に賃金のプレミアムがあることはないという興味深い結果といえる。

「希望職種」に就職することにおいては専門学校に進学することに統計的にプラスに有意な結果が得られた。この結果から、専門学校に進学した場合、専門学校の職業訓練を通じて希望職種へのキャリア形成が行われることが実際に学生の就業に影響に与えていることが考えられ、専門学校の関連職業への就職率の高さを裏付ける結果となった。

「待遇満足度」では統計的に有意な結果はあられず、似た属性を持つ学生同士では、進学

先が異なることでは、賃金や正社員以外のその他諸々の雇用待遇すべてを総合して現状の就職に対する満足度は変わらないことがわかった。

以上から、本分析では大学もしくは専門学校への進学を選択した似た属性を持つ学生のうち専門学校に進学した学生は「正社員」「希望職種」がプラスに有意となり、その他の説明変数が有意にならなかったため、専門学校に進学をしたほうが雇用の側面で比較的高い教育のリターンを得ている傾向にあり、学歴主義の影響による大学進学は必ずしも正しい選択ではないことが指摘でき、高校生にとって進路選択をいま一度考慮する必要性を与える結果となった。

### 5-3. 分析 3

分析 2 において、大学に進学した人よりも専門学校に進学した人のほうが希望職種に就ける確率が高いとの結果を受けて、続く分析 3 では専門学校生が希望職種に最終的に就くために必要な要素として、進路選択時点でどのような要因が重要となってくるか検証した。結果は表 9 に示しており、以下に示す 2 項目が有意な値を示す結果となった。

1 つ目は「進路影響・学校の進路指導」であり、10%水準でプラスに有意となった。これは、学校の進路指導担当が生徒の専門学校進学に影響を与えた場合、生徒が希望職種につきやすくなることを示している。すなわち生徒は、的確な情報を多く有する学校の進路指導担当のアドバイスを受けて専門学校進学を決断することが、自らのキャリアの観点から重要であると考えられる。一方同じ進路影響でも、家族や中高の先生といった身近な存在や、企業訪問やパンフレットなどの正確な情報との接触を示す変数は有意にならなかった。

2 つ目は「親進路考慮・立地近さ」で、こちらはマイナスに有意となった。親が進学先の立地条件を考慮して進学先の進言をおこなっていた場合、子供が希望職種につきにくいことを示している。言い換えると、子どもが自らの意志でなく親の意見で進路選択をすると、社会人になって満足いく待遇を得られないと解釈することができる。また子ども自身の進路考慮に関する変数群は、いずれも有意な値にならなかった。

## 6 おわりに

本稿では、これまで必ずしも注目されてこなかった専門学校に進学する学生に焦点を当て、専門学校進学の規定要因を明らかにするとともに、専門学校進学が将来の労働変数にどのような帰結をもたらすかを分析した。具体的には、①高校生の進路や進学意思決定要因、②進学先ごとの雇用状況及び労働待遇、③専門卒業後の希望職種での労働を実現する学生についての 3 つの分析を行った。分析の結果、以下のことが明らかになった。

まず、分析 1-1 では、特に「中 3 成績」「父親所得」といった本人の属性や家庭環境だけで

なく、「学歴よりも資格が重要」という価値観が進路選択において重要な要因となっていることがわかった。

分析 1-2 では、専門学校進学者と大学進学者間での進学決定要因を推計し、専門学校に進学する学生の特徴を検証した。説明変数には分析 1-1 で用いた 5 つのカテゴリーと、『進学理由』を加えた計 6 つのカテゴリーで構成した。分析結果により、専門進学を選択する学生は進学理由が明確であり、親と共に資格取得を重要視していた。これより、彼らは大学へ進学した学生と比べ、はっきりとした将来のビジョンを持つという特徴が明らかとなった。

分析 2 では、学歴主義の影響により、学歴と労働状況が結びついているという認識から大学進学を目指す人が増えているのではないかという考察のもと、似通った能力や価値観を持つ大学進学者・専門学校進学者を抽出し、彼らが専門学校に進学した場合と、大学に進学した場合とで所得等に優劣があるのかどうかを検証した。分析の結果、専門学校進学者は正社員になりやすく、希望職種に就きやすいことが明らかとなり、大学に進学することが労働状況を向上させるとは必ずしも限らない結果になった。しかし、待遇満足度では有意な結果が得られなかったため雇用形態や職種以外の労働待遇では負の影響を及ぼしている可能性が残っている。

分析 3 では、分析 2 の結果を受けて、専門を卒業して希望職種に就く人は、高校時点でどのような特徴を持っているのかを明らかにした。学校の進路指導担当のアドバイスを受けること、親の意見ではなく自らの意思で進路先を決定することが重要だとわかった。

最後に本稿の分析についての留意点を参照する。本稿の分析で用いたデータでは、『学校基本調査』との進路先割合において、大学と就職で 5%以上の差が生じていた。また経年調査の形を採用しているものの、進学先や学年によって設問内容が変わっていたことによりパネルデータとして分析に用いることができなかった。さらに、追跡調査が 5 年間で終了しているため、専門学校に進学することによる影響が就職直後の若年時点のみしか把握できなかった。学校選択の影響がより中長期にどのように表れてくるかを検証するためには、より長期にわたって追跡調査したパネルデータが必要であり、こうした検証は今後の課題として残される。

## 7 参考文献

- ・濱中淳子 (2009) 「専修学校卒業者の就業実態」『教育と労働』, 34-43
- ・矢野眞和 (1984) 『教育の収益率にもとづいた教育計画の経済学的分析』 学位請求論文
- ・矢野眞和 (1996) 『高等教育の経済分析と政策』 玉川大学出版部
- ・金子元久・吉本圭一 (1989) 「高等教育機会の選択と家庭所得—選択モデルによる規定要因分析—」『広島大学 大学研究センター 大学論集』, 103 - 126
- ・倉内士郎 (1980) 「専修学校の役割の検討」『教育学研究第 47 巻 第 4 号』, 289-297

図1：進路状況推移

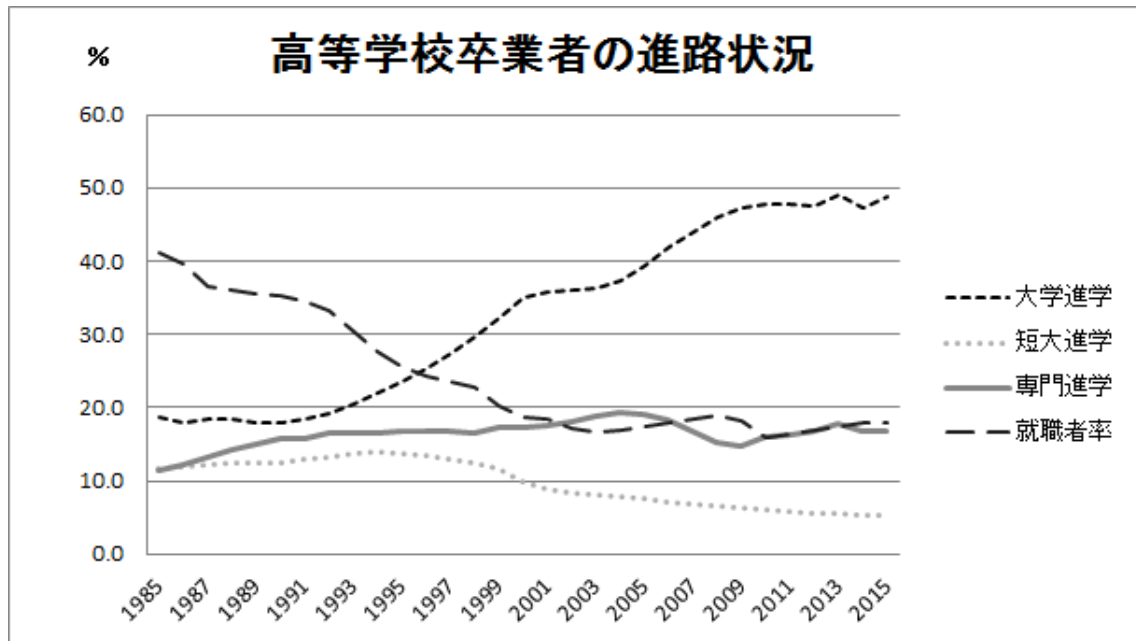




図2：賃金格差（対大学. 35歳～39歳）の推移

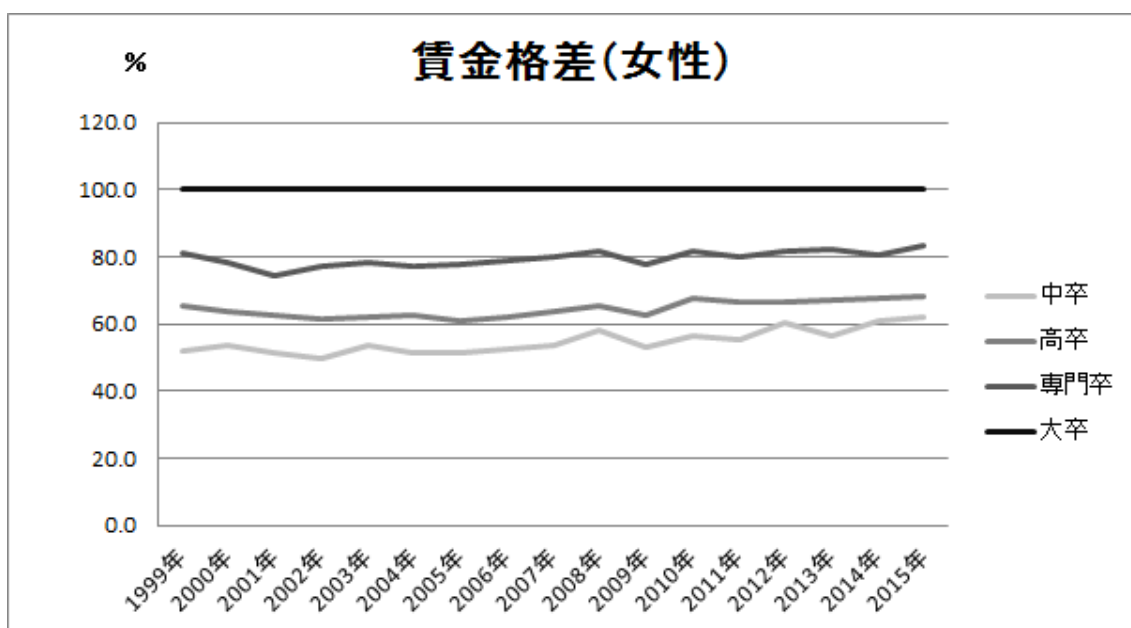
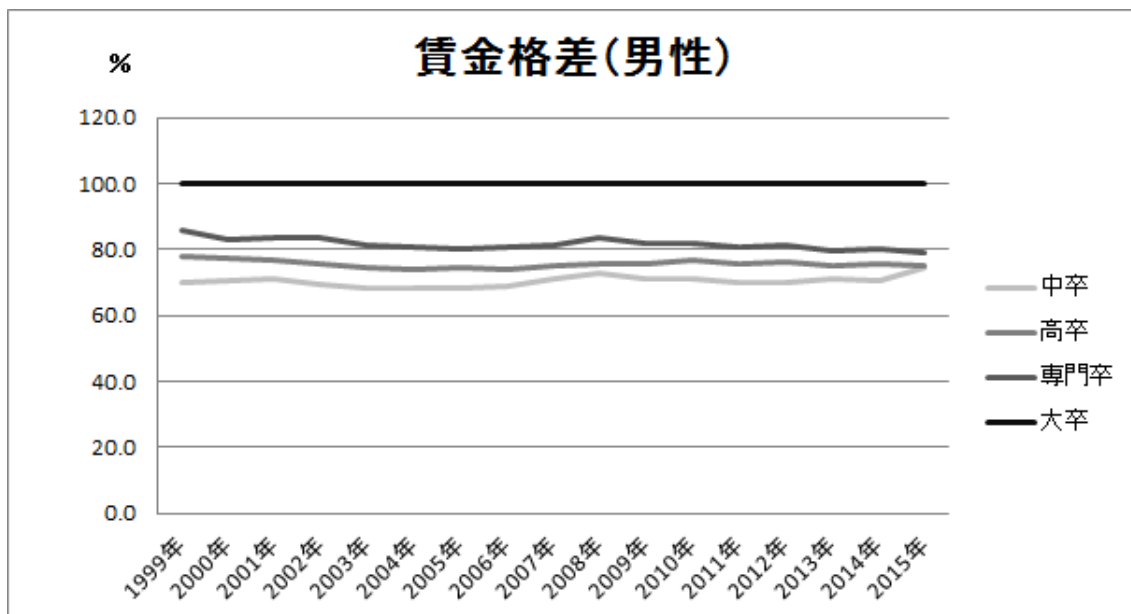


図 3：就職率推移

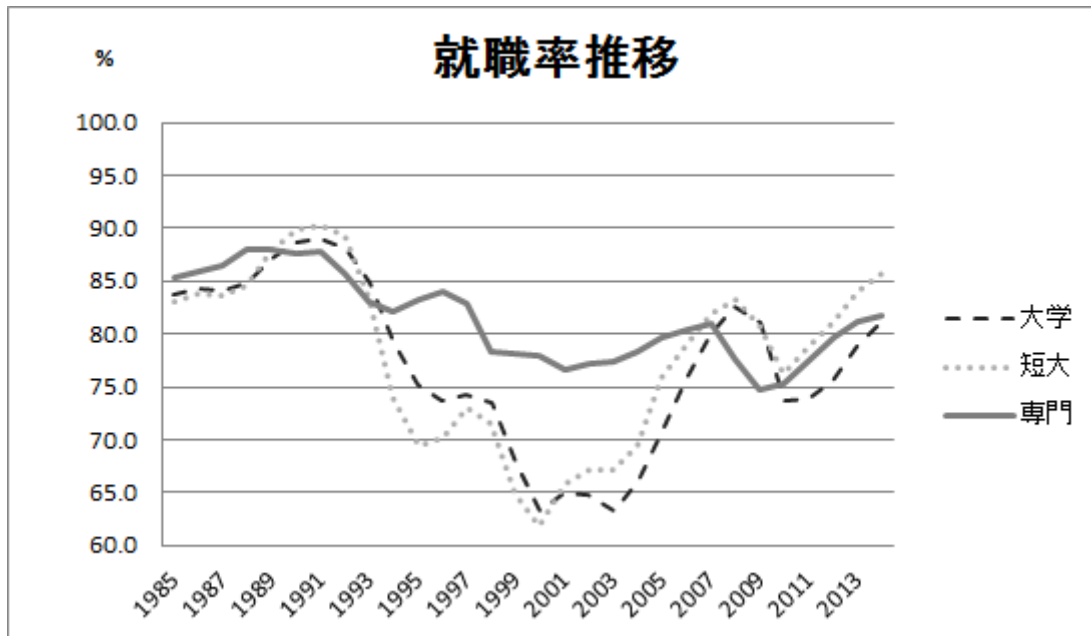


表 1：進学先別割合

	高校生の進路選択についての追跡調査	学校基本調査
大学	49.2	39.3
専門学校	17.1	19.0
短大	9.4	7.9
就職	11.8	17.2

表 2：記述統計 (分析 1 - 1)

		観測数	平均値	標準偏差
<b>(被説明変数)</b>				
	進路ダミー	2743	2.174	0.885
<b>(説明変数)</b>				
<b>本人の属性</b>				
	中3成績	2743	3.386	1.220
	性別ダミー	2743	0.478	0.500
	長子ダミー	2743	0.486	0.500
<b>親の属性</b>				
	父親中卒	2743	0.048	0.215
	父親高卒	2743	0.404	0.491
	父親専門短大卒	2743	0.099	0.299
	母親中卒	2743	0.013	0.115
	母親高卒	2743	0.481	0.500
	母親専門短大卒	2743	0.381	0.486
	父親所得	2743	6802406.0	3194401.0
	母親所得	2743	1256289.0	1628613.0
<b>環境要因</b>				
	クラス大学進学希望	2743	0.549	0.523
	成績を親と会話	2743	0.693	0.461
	進路を親と会話	2743	0.872	0.334
<b>本人の価値観</b>				
	大卒高卒収入差	2743	2.890	0.965
	意見資格重要	2743	0.848	0.359
	意見実力第一	2743	0.897	0.304
	意見学歴安定でない	2743	0.898	0.303
<b>親の価値観</b>				
	意見資格重要・親	2743	0.867	0.340
	意見実力第一・親	2743	0.938	0.242
	意見学歴安定でない・親	2743	0.964	0.186

表 3 : 記述統計 (分析 1 - 2)

		観測数	平均値	標準偏差
<b>(被説明変数)</b>				
	専門進学ダミー(大学)	2074	0.247	0.432
<b>(説明変数)</b>				
<b>本人の属性</b>				
	中3成績	2074	3.552	1.209
	性別ダミー	2074	0.518	0.500
	長子ダミー	2074	0.501	0.500
<b>親の属性</b>				
	父親中卒	2074	0.034	0.181
	父親高卒	2074	0.360	0.480
	父親専門短大卒	2074	0.099	0.299
	母親中卒	2074	0.008	0.088
	母親高卒	2074	0.441	0.497
	母親専門短大卒	2074	0.405	0.491
	父親所得	2074	7141273.0	3253934.0
	母親所得	2074	1250482.0	1676664.0
<b>環境要因</b>				
	クラス大学進学希望	2074	0.631	0.483
	成績を親と会話	2074	0.712	0.453
	進路を親と会話	2074	0.877	0.328
<b>本人の価値観</b>				
	大卒高卒収入差	2074	2.951	0.964
	意見資格重要	2074	0.833	0.373
	意見実力第一	2074	0.902	0.298
	意見学歴安定でない	2074	0.896	0.306
<b>親の価値観</b>				
	意見資格重要・親	2074	0.856	0.351
	意見実力第一・親	2074	0.944	0.231
	意見学歴安定でない・親	2074	0.966	0.181
<b>進学理由</b>				
	学生生活楽しみたい	2074	0.849	0.358
	やりたいこと見つかる	2074	0.745	0.436
	職業直結	2074	0.875	0.331
	実用的な知識・技能	2074	0.914	0.280

表4：記述統計（分析2）

		観測数	平均値	標準偏差
<b>(被説明変数)</b>				
	就職ダミー	557	1	0
	正社員ダミー	557	0.871	0.336
	月給	539	175334.0	36078.4
	時給	534	854.6	208.4
	希望職種ダミー	557	0.734	0.442
	待遇満足度	557	0.618	0.486
<b>(説明変数)</b>				
<b>専門進学</b>				
	専門進学ダミー(大学)	557	0.275	0.447
<b>本人の属性</b>				
	性別ダミー	557	0.395	0.489
	中3成績	557	3.553	1.172
<b>職場環境</b>				
	従業員	557	1598.8	2356.3
	勤続年数	553	1.416	0.858
	正社員ダミー	557	0.871	0.336
<b>親の属性</b>				
	父正社員ダミー	557	0.013	0.111
	母正社員ダミー	557	0.011	0.103

表 5 : 記述統計 (分析 3)

		観測数	平均値	標準偏差
<b>(被説明変数)</b>				
	持続期間	596	2.045	1.479
<b>(説明変数)</b>				
	性別ダミー	596	1.599	0.491
	長子ダミー	596	0.430	0.495
<b>進路意識</b>				
	高1,2進学意識	596	0.802	0.399
	進路決定済	596	0.784	0.412
<b>進路影響</b>				
	進路影響・家族	594	0.635	0.482
	進路影響・友人	595	0.408	0.492
	進路影響・学校の進路指導	595	0.334	0.472
	進路影響・中高の先生	595	0.272	0.446
	進路影響・塾の先生	595	0.062	0.242
	進路影響・就職ガイドブック	595	0.314	0.465
	進路影響・企業訪問	593	0.327	0.470
	進路影響・学校パンフ	596	0.696	0.577
	進路影響・オープンキャンパス	596	0.763	0.425
<b>進路考慮</b>				
	進路考慮・成績	596	0.727	0.446
	進路考慮・家庭経済	596	0.638	0.481
	進路考慮・家庭事情その他	595	0.239	0.427
	進路考慮・立地近さ	595	0.587	0.493
	進路考慮・志望明確	595	0.921	0.270
<b>親進路考慮</b>				
	親進路考慮・成績	596	0.698	0.460
	親進路考慮・家庭経済	596	0.680	0.467
	親進路考慮・家庭事情その他	594	0.347	0.476
	親進路考慮・立地近さ	594	0.611	0.488
	親進路考慮・志望明確	596	0.975	0.157

表6 分析1-1 推計結果

VARIABLES	(1) 専門学校	(2) 大学	(3) 短大	(4) 高卒
中3成績	-0.0452***	0.0901***	-0.0216***	-0.0232***
	-0.00753	-0.00936	-0.00539	-0.00419
性別(男性:1)	-0.0712***	0.254***	-0.195***	0.0123
	-0.0161	-0.0203	-0.013	-0.00844
長子ダミー	-0.0445***	0.0705***	-0.00539	-0.0206**
	-0.0167	-0.0208	-0.0121	-0.00888
父親中卒	-0.0106	-0.142**	0.00934	0.144***
	-0.0405	-0.0559	-0.033	-0.0418
父親高卒	0.0763***	-0.170***	0.019	0.0747***
	-0.0206	-0.025	-0.0146	-0.014
父親専門短大卒	0.0691**	-0.138***	0.00651	0.0623**
	-0.0333	-0.039	-0.0223	-0.0255
母親中卒	-0.00288	-0.164	0.0238	0.143*
	-0.0821	-0.114	-0.0649	-0.0827
母親高卒	0.0812**	-0.146***	0.0196	0.0447**
	-0.034	-0.0392	-0.0228	-0.0222
母親専門短大卒	0.0803**	-0.114***	0.0277	0.00602
	-0.035	-0.0392	-0.0231	-0.0222
父親所得	-1.02e-08***	2.27e-08***	-2.25e-09*	-1.03e-08***
	-1.23E-09	-3.08E-09	-1.29E-09	-2.92E-09
母親所得	-5.08E-09	3.19E-09	2.85E-09	-9.60E-10
	-5.29E-09	-7.02E-09	-3.92E-09	-3.63E-09
クラス大学進学希望	-0.151***	0.278***	-0.00299	-0.124***
	-0.018	-0.021	-0.0113	-0.0113
成績を親と会話	-0.0814***	0.0852***	0.00931	-0.0131
	-0.021	-0.0256	-0.0145	-0.0106
進路を親と会話	0.0508**	-0.0393	-0.0287	0.0173
	-0.024	-0.0338	-0.0234	-0.0116
大卒高卒収入差	0.00469	0.00793	0.00162	-0.0142***
	-0.00889	-0.0111	-0.00637	-0.00478
意見資格重要	0.101***	-0.154***	0.0297*	0.0240**
	-0.021	-0.0273	-0.0164	-0.011
意見実力第一	0.0146	-0.00633	0.0218	-0.0300*
	-0.0276	-0.0356	-0.0188	-0.0181
意見学歴安定でない	-0.0123	0.00309	0.00916	7.44E-05
	-0.0291	-0.0357	-0.0196	-0.015
意見資格重要・親	0.0774***	-0.117***	0.0223	0.0177
	-0.0232	-0.0298	-0.0172	-0.0124
意見実力第一・親	-0.00894	0.0444	-0.023	-0.0124
	-0.0372	-0.0464	-0.0301	-0.0198
意見学歴安定でない・親	0.0617	-0.0606	-0.0157	0.0146
	-0.0386	-0.0534	-0.0352	-0.0187
Observations	2,743	2,743	2,743	2,743

備考) ( ) 内は標準誤差。

\*、\*\*および\*\*\*は、それぞれ 1%、5%、10%水準で統計的に有意であることを示す。

表中の係数は、限界効果である。

表7 分析 1-2 推計結果〈専門進学ダミー(大学)〉

VARIABLES	(1) 専門進学(大学)	(2) 専門進学(大学)	(3) 専門進学(大学)	(4) 専門進学(大学)	(5) 専門進学(大学)
中3成績	-0.0617*** (-7.705)	-0.0604*** (-7.350)	-0.0582*** (-7.074)	-0.0586*** (-7.157)	-0.0522*** (-6.737)
性別ダミー	-0.151*** (-8.192)	-0.141*** (-7.485)	-0.132*** (-7.027)	-0.133*** (-7.095)	-0.116*** (-6.554)
長子ダミー	-0.0461** (-2.559)	-0.0501*** (-2.695)	-0.0476*** (-2.577)	-0.0500*** (-2.723)	-0.0474*** (-2.747)
父親中卒	0.0741 (1.416)	0.0309 (0.598)	0.0412 (0.795)	0.0412 (0.801)	0.00467 (0.100)
父親高卒	0.116*** (5.355)	0.109*** (4.829)	0.108*** (4.831)	0.105*** (4.708)	0.0870*** (4.116)
父親専門短大卒	0.104*** (3.057)	0.0980*** (2.807)	0.0923*** (2.643)	0.0881** (2.540)	0.0500 (1.565)
母親中卒	0.0737 (0.695)	0.0965 (0.815)	0.0636 (0.559)	0.0823 (0.704)	0.0443 (0.410)
母親高卒	0.121*** (3.639)	0.126*** (3.442)	0.117*** (3.209)	0.115*** (3.198)	0.112*** (3.294)
母親専門短大卒	0.0951*** (2.897)	0.106*** (2.933)	0.0955*** (2.658)	0.0939*** (2.638)	0.0865*** (2.592)
クラス大学進学希望	-0.246*** (-12.093)	-0.226*** (-10.805)	-0.224*** (-10.706)	-0.221*** (-10.636)	-0.198*** (-9.937)
成績を親と会話	-0.104*** (-4.701)	-0.0963*** (-4.238)	-0.0898*** (-3.984)	-0.0928*** (-4.129)	-0.0735*** (-3.465)
進路を親と会話	0.0631** (2.286)	0.0616** (2.190)	0.0511* (1.801)	0.0519* (1.846)	0.0415 (1.515)
父親所得		-1.52e-08*** (-4.695)	-1.48e-08*** (-4.588)	-1.46e-08*** (-4.537)	-1.21e-08*** (-4.084)
母親所得		-3.89e-09 (-0.653)	-3.87e-09 (-0.650)	-3.84e-09 (-0.648)	-4.11e-09 (-0.742)
大卒高卒収入差			-0.000606 (-0.062)	-0.000278 (-0.029)	0.000914 (0.101)
意見資格重要			0.120*** (4.732)	0.108*** (4.232)	0.0843*** (3.465)
意見実力第一			0.00972 (0.310)	0.0129 (0.412)	0.00437 (0.145)
意見学歴安定でない			0.00174 (0.056)	-0.00611 (-0.195)	0.00239 (0.081)
意見資格重要・親				0.0976*** (3.591)	0.0765*** (2.990)
意見実力第一・親				-0.0184 (-0.444)	-0.0240 (-0.587)
意見学歴安定でない・親				0.0704 (1.497)	0.0704 (1.619)
学生生活楽しみたい					-0.207*** (-7.385)
やりたいこと見つかる					-0.125*** (-5.841)
職業直結					0.158*** (5.505)
実用的な知識・技能					0.127*** (3.262)
Observations	2,312	2,099	2,096	2,093	2,074

備考) ( ) 内は標準誤差。

\*、\*\*および\*\*\*は、それぞれ 1%、5%、10%水準で統計的に有意であることを示す。

表 8 分析 2 推計結果



VARIABLES	(1) 就職	(2) 正社員	(3) 月給	(4) 時給	(5) 希望職種	(6) 待遇満足度
専門進学(大学)	0.0430 (1.145)	0.118*** (3.110)	5,537 (0.763)	30.50 (0.830)	0.199*** (5.071)	-0.0548 (-0.773)
性別(男性:1/女性:0)	0.00480 (0.121)	0.111*** (2.674)	9,892* (1.772)	-4.526 (-0.152)	0.0706* (1.811)	-0.216** (-2.563)
中3成績	0.0374** (2.307)	0.0503 (1.615)	1,645 (-0.632)	8.057 (0.526)	0.0594*** (3.364)	0.0729*** (2.745)
従業員			1.165 (1.227)	0.00340 (0.642)	1.06e-06 (0.143)	2.45e-05* (1.883)
勤続年数			-4,119 (-1.393)	-30.01** (-2.125)		
正社員			26,595*** (5.273)	6.838 (0.225)	-0.00992 (-0.166)	-0.0590 (-0.807)
父正社員	-0.208 (-1.179)	0.113*** (3.811)				
母正社員	0.0774 (0.699)	0.107*** (3.122)				
Constant	0.673*** (9.289)	0.580*** (3.827)	145,249*** (13.776)	852.5*** (13.834)	0.465*** (5.043)	0.467*** (3.792)
Observations	848	670	545	540	564	557
R-squared	0.021	0.086	0.080	0.034	0.086	0.120

備考) ( ) 内は標準誤差。

\*、\*\*および\*\*\*は、それぞれ 1%、5%、10%水準で統計的に有意であることを示す。

表9 分析3 推計結果

VARIABLES	(1) 持続期間
性別ダミー	1.036 (-0.0993)
長子ダミー	0.904 (-0.0842)
高1,2進学意識	0.884 (-0.106)
進路決定済	0.976 (-0.113)
進路影響・家族	0.924 (-0.093)
進路影響・友人	1.004 (-0.0984)
進路影響・学校の進路指導	1.280* (-0.164)
進路影響・中高の先生	0.92 (-0.126)
進路影響・塾の先生	1.111 (-0.237)
進路影響・就職ガイドブック	0.975 (-0.107)
進路影響・企業訪問	0.924 (-0.0973)
進路影響・学校パンフ	0.961 (-0.106)
進路影響・オープンキャンパス	0.976 (-0.12)
進路考慮・成績	1.017 (-0.113)
進路考慮・家庭経済	1.056 (-0.111)
進路考慮・家庭事情その他	1.03 (-0.119)
進路考慮・立地近さ	0.926 (-0.0905)
進路考慮・志望明確	0.908 (-0.171)
親進路考慮・成績	0.965 (-0.106)
親進路考慮・家庭経済	0.969 (-0.112)
親進路考慮・家庭事情その他	1.161 (-0.127)
親進路考慮・立地近さ	0.836* (-0.0842)
親進路考慮・志望明確	0.972 (-0.296)
Observations	505

備考) ( ) 内は標準誤差。

\* は、10%水準で統計的に有意であることを示す。